

二〇一六年九月二五日(参加者一七名)

昨夜の雨かくも無残に破れ芭蕉
句碑の文字みな個性あり萩の寺
はらはらと散らしてみたく萩に触る
法話聞くお堂へ庭の萩の風
台風禍払ふ護摩供の大煙
火渡りをせむと跣の翁かな
第目の土に白々萩の屑
四阿の四方より通ふ萩の風
境内に読経洩れくる萩日和
延命橋渡りしところ曼珠沙華
はなれ家へ標かたむく芒原
立ち入れぬ猿戸に透けて萩真白
観音の面に色なき風通ふ
護摩焚の法螺の音萩をこぼしけり
参道を狭しと埋め萩盛る
萩むらの句碑に先師を偲びけり
座禅石雨に濡れもし破れ芭蕉
音もなく妹背の句碑へ萩時雨
風あふつ芭蕉の影や花頭窓
萩むらの小径に小さき石仏
萩小径ふりそむ雨に傘開く
竜と化し秋天へ消ゆ護摩煙

たか子
たか子
たか子
たか子
うつぎ
うつぎ
うつぎ
うつぎ
こすもす
こすもす
こすもす
小袖
小袖
小袖
せいじ
せいじ
せいじ
菜々々
菜々々
菜々々
ひかり
ひかり
ひかり

樹下に坐す微笑観音薄紅葉
萩小径辿りあまたの句碑めぐる
法話身に入みて背筋を伸ばしけり
山門を潜るやいなや萩浄土
しだれ萩もちあげて句碑誦しにけり
そば通るだけなのに萩こぼれけり
子規句碑に佇みをれば秋の声
句帳もておもひおもひに萩に佇つ
しだれ萩お百度石を隠しけり
蝶になり飛び立ちさふや風の萩
撫でもして連理の句碑の秋を聞く
秋灯下子規直筆にまみえけり
禅寺に隣る保育所小鳥来る
重さうに雨粒やどすしだれ萩
夫婦句碑連理となりて萩浄土
虚子の句碑侍る山門竹の春
山門の一步に仰ぐ薄紅葉
かがみこみ句碑よむ肩に萩こぼる
句碑めぐり寺苑の秋を聞きにけり
萩に目もくれず護摩焚く行者どち
子規句碑の侍者のごとくに実むらさき

満天
満天
満天
よし子
よし子
わかば
わかば
わかば
なおこ
なおこ
はく子
はく子
宏虎
宏虎
ぼんこ
ぼんこ
有香
有香
よう子
よう子
よう子

定例会みのる選

二〇一六年九月二五日(参加者一七名)